

芦屋の文化財

芦屋市には約2万年にわたる長い歴史があり、様々な文化財が残されてきた。本書ではこれらの中で、現地を訪れると実物や解説板等を見学できる市内61か所の文化財を取り上げ、説明している。なお、紹介する文化財は、昭和20年(1945)以前のものに限っている。

2～6ページには、本書で紹介する文化財の所在地を示した地図を掲載している。

コラム

ナウマンゾウの化石

ナウマンゾウの化石は、昭和36年(1961)、芦有^{ろゆう}ドライブウェイの建設工事中に奥山の芦屋ゲート北方100m付近(標高約320m)で出土した。大阪市立自然史博物館によって、3～10万年ぐらい前のナウマンゾウの右下顎^{あご}の第三真臼歯^{しんきゅうし}(乳歯)と鑑定されている。大きさは13.6cm。

この化石は、現在、芦屋市立美術博物館に収蔵されている。



① 城山遺跡・鷹尾城跡 (大字城山・地図A1)



鷹尾山は通称「城山」と呼ばれ、その頂上(標高約260m)から北側尾根筋一帯に城山遺跡が分布している。高地性集落跡で、現地からの眺望はとも良い。この遺跡からは弥生時代中期から後期(今から

約2000年前)の土器が出土しているが、本格的な発掘調査は行なわれておらず詳細はわかっていない。

また、山頂一帯は鷹尾城跡でもある。鷹尾城は、細川高国たかくに方の国侍、摂津豊島地方の豪族である瓦林政頼かわらばやしまさよりが16世紀前半に築いた中世山城である。永正8年(1511)には、鷹尾城をめぐって、細川高国と細川澄元すみもとの軍勢が戦った。この戦いについては、19ページのコラム「芦屋の物語『松若物語』」で説明している。

② 国指定史跡 会下山遺跡 (三条町・地図A2)

昭和29年(1954)に発見された弥生時代中期～後期(紀元前2世紀～紀元1世紀)の高地性集落跡。昭和31～36年(1956～1961)に発掘調査を実施した。その後、平成20・21年(2008・2009)に実施した発掘調査の成果により、平成23年(2011)2月7日に国指定史跡に指定された。

遺跡は会下山全体に広がっており、竪穴住居跡や祭場跡、火たき場跡、堀跡、墓跡等が発掘されている。現地には高床倉庫を復元している。標高200mの山頂付近からの眺望は大変良く、遠くの地域まで見わたすことができる。

芦屋市聖苑せいえんの門の東側にあるハイキング道入り口からハイキング道を歩いて自由に見学できる。

※現地には、解説板があります。



芦屋の物語「松若物語」

芦屋の地は、阪神地域の代表的な古戦場として知られている。戦国時代、16世紀の頃、芦屋では、細川高国たかくにに味方をした国侍、瓦林政頼かわらしまさより たかおじょうが鷹尾城たかお(18ページ)に立てこもっていた。一方、同じ細川家でありながら高国を敵にして勢力争いをしてきた細川澄元すみもとが、高国方の軍勢と芦屋川や鷹尾城で、しばしば戦った。芦屋の地は阿波(徳島県)の澄元方の進路をおさえる交通上の要地である灘筋を制圧するのには格好の場であったのである。

永正8年(1511)、細川高国と細川澄元の両軍勢による鷹尾城をめぐる攻防は、激戦の末、一時は高国側が勝ったが、敗報を聞いた澄元側の赤松勢あかまつは大軍を擁して播磨(兵庫県南西部)からおし寄せ攻撃したので、ついに瓦林政頼らは密かに鷹尾城を捨てて、伊丹城に逃れた。

この鷹尾城の攻防には、「松若物語」という悲哀な物語がある。そのあらすじは、次のようなものである。

勢力が強くなった瓦林政頼に降参を申し入れてきた澄元方の地侍じざむらいの一人に河島兵庫助かわしまひょうごのすけという者がいた。政頼は彼を厚遇して鷹尾城を守らせた。兵庫助には松若まつわかという16歳の息子がいたが、とても賢くて歌道に長けていた。瓦林政頼も歌を作ることでよく知られており、松若を居城の越水城こしみずじょう(西宮市)で側近として召し使った。ところが、「兵庫助は敵に内通しているらしい」という噂が広まった。松若はこのことを鷹尾城にいる父に早く知らせなければ父の命が危ないと思い、密かに越水城を抜け出して鷹尾城に向かったが、すでに父は捕えられていた。城山から煙が流れているのをみた松若は、「父は自害した。もはやこれまで」と逃げることが諦め、親戚いまいにししょうげんの今西将監を通じて政頼への取次ぎを頼んだ。これを聞いた政頼はたいそう不憫に思い松若を助けようとしたが、家臣から「このような賢い若者であれば、将来父の仇を討とうとする恐れがあります。助けることはなりません」と強く言われたため、やむなく松若は西宮ろくたんじの六湛寺で自害させられることとなった。辞世に「父に我つかふ願も三瀬川みつせがわともに越ゆべき道のうれしさ」の一句を残した。

『瓦林政頼記』(成立年未詳)に記された史実に近い悲話である。

③ さんじょうぶんかざいせいりじむしょ 三条文化財整理事務所 (三条町・地図A3)



平成13年(2001)に市内の文化財の調査や整理作業、収蔵のために芦屋市役所三条分室内に設けた。

市内の遺跡から発掘され

た土器や石器等の出土品の多くを保管しており、展示室ではその一部を展示している。見学する場合は、事前に開館日時の確認が必要(問い合わせ:芦屋市教育委員会生涯学習課 0797-38-2115)。

④ あさひづかこふん 旭塚古墳 (山芦屋町・地図A4)

城山・三条古墳群に属する古墳で、昭和36年(1961)に発見され、京都大学考古学研究室によって発掘調査が行なわれた。その後、平成19年(2007)に芦屋市教育委員会が再び発掘調査を実施し、飛鳥時代(7世紀中頃)に築造された古墳であることが明らかになった。墳丘は貼石を施して多角形に作られている。横穴式石室の大きさは、全長9.8m、

玄室長4.1m、玄室幅2.1m、羨道長5.7m、羨道幅1.6m、残存高2.1mである。

発掘調査後、石室を地中に埋めて保存し、山芦屋遺跡緑地として整備している。

※現地には解説板があります。



芦屋にあった水車場すいしゃば



発掘された芦屋川水車場跡（山芦屋町）

芦屋市域を含む六甲山地南麓では、江戸時代中期(18世紀頃)から急流を利用して産業用の巨大水車が数多く稼動していた。これらの水車は主に菜種なたねや綿実めんじつの油絞りや酒造用の精米のために使われ、明治時代から大正時代には「灘目素麺」の原材料と

なる小麦粉の製造なども加わった。しかし、動力の近代化の波に追われ、市域にあった水車は昭和20年代までにすべて廃絶した。

芦屋川中流の西岸にある山芦屋町では、水車場の石臼が宅地石垣等の石材として再利用されている。また、平成18年(2006)にはマンション建設に伴い芦屋川水車場跡(山芦屋町)を発掘調査し、その一部がこのマンションの前庭に移設保存され、解説板が設置されている。

⑤角石堰堤かどいしえんてい・⑥河原毛堰堤かわらけえんてい・⑦杖東堰堤つえひがしえんてい

⑧芦屋川第一号堰堤あしやがわだいいちごうえんてい（山芦屋町・山手町・地図A5～8）

昭和13年(1938)の阪神大水害後、芦屋川の中流域に設けられた堰堤群。角石堰堤と杖東堰堤は、兵庫県によって昭和16年度に建設された。

河原毛堰堤は昭和16年(1941)6月に、芦屋川第一号堰堤は昭和15年(1940)4月に、いずれも内務省神戸土木出張所によって建設されている。



芦屋の伝説

「金兵衛車やけ車」

江戸時代の中期から農村が経済的に成長を遂げ、各地に特産品作りの手工業生産がおこった。六甲山地南麓では灘の酒造りが盛んとなり、酒米の精米には六甲山地を流れる河川の水を用いた水車が利用された。芦屋には水車にまつわる伝説があり、そのあらすじは次のようなものである。

灘の清酒は有名になるにつれて御所や幕府に献上され始め、献上酒用の米を搗く水車は高い格式が与えられた。ある年、丹波の国(兵庫県北東部・京都府中部・大阪府北部)の若者が、この格式高い水車で米搗き手に選ばれた。それは彼にとっても家族にとっても、また村にとっても大変名誉なことであった。しかし、彼には幼馴染で思いあった美しい娘がいた。芦屋への旅立ちの日が近づくにつれ、離別の苦しさが募り、いつしか二人はその任務を解いてほしいと願うようになっていた。しかし、周囲の人々は二人の願いに耳を傾けようとはしなかった。

六甲越えて芦屋に着いた若者は、城山の麓にあった由緒ある「金兵衛車」に入った。その水車の主人は、その水車の格式や彼の任務が名誉あることを説き、酒米を搗く時には、まず芦屋川で身を淨め、全部搗き終えるまで水車から出ることも他人と無駄話をすることも固く禁ずるしきたりを言い渡した。この日から若者は黙々しく勤めに励んだ。

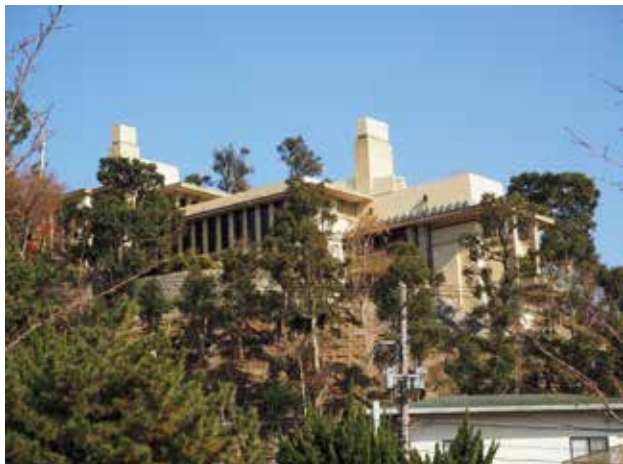
一方、丹波に残った娘には縁談が持ち込まれた。思い詰めた娘は、ついに村を出て、恋しい若者のあとを慕って、はるばる芦屋の里に訪ね着いたのだった。しかし、娘の前には水車の主人が立ちはだかった。

幾度訪ねても会えぬうちに、とうとう半狂乱になった娘は、裏山から二枝の櫛を持って現れ、眼をつり上げ髪を振り乱して山野を駆け巡り、最後にぐるぐる水車のまわりを駆け回った。そのうち彼女の体中が炎と化して天空に上っていった。その夜も更けた頃、金兵衛車は奇妙な光に包まれ、水車も白も若者も主人も、ついに一つの火の車となって夜空に昇り、姿を消してしまった。

それがいつのことか、また若者の名を何といったか、誰も知らない。しかし、そのうち芦屋では、子ども達も「金兵衛車やけ車」と謡うようになったのである。

9 国指定重要文化財

ヨドコウ迎賓館(旧山邑家住宅) (山手町・地図A9)



大正13年(1924)、^{さくらまさむね}「櫻正宗」の銘柄で知られる灘の酒造家8代目^{やまむらたざえもん}山邑太左衛門が建てた別邸。帝国ホテル建設のため来日していた、近代建築の三大巨匠のひとりであるフランク・ロイド・ライト(1867-1959)が大正7年(1918)に設計した。ライトが大正11年(1922)に帰国した後、彼の弟子である^{えんどうあらた}遠藤新(1889-1951)と^{みなみまこと}南信(1892-1951)が実施設計及び施工管理を行ない、大正12年(1923)にようやく着工し、大正13年(1924)に竣工した。

その後、昭和22年(1947)には株式会社淀川製鋼所の所有となり、昭和49年(1974)5月21日には国指定重要文化財に指定された。現在、ヨドコウ迎賓館として公開されている(問合せ:ヨドコウ迎賓館 0797-38-1720)。



はんしんだいすいがいあしやがわけっかいのちせきひ
10 阪神大水害芦屋川決壊之地石碑 (東芦屋町・地図A10)



昭和13年(1938)、阪神地方は空前の大
水害に見舞われた。6月28日から降り出し
た雨は、7月5日には最大雨量(1日326mm)
を測る大暴風を伴う豪雨となり、土石流が
発生して芦屋川と宮川が氾濫した。精道村
は多くの箇所が泥海と化した。

精道村の被害状況は、死者3人、重傷者2
人、家屋流出14戸、全壊14戸、半壊111戸、
床上浸水790戸、床下浸水1,458戸、橋梁流

出6、破損8、道路堤防の破損決壊10か所である。

開森橋東詰付近の決壊場所には、昭和63年(1988)7月に「阪神
大水害芦屋川決壊之地」と刻まれた石碑が建てられた。平成28年
度には、開森橋の架け替えに伴い、少し南東に移動した。

コラム

芦屋の名木「潮(汐)見桜」

潮見桜は芦屋の名木で、初代のもは西山町あたりにあった
塩通山法恩寺(29ページ)内に在原業平(27ページ)が植えたとい
えられている。その名は、この桜から一望できる芦屋沖に紀州熊
野から流れてくる虹のような潮筋がみえたことに由来するという。
2代目は前田町あたりの大竺堂の森にあって、寛政8年(1796)刊行
の『摂津名所図会』(12ページ)にも記されている。3代目は明治6
年(1873)、開森橋の西詰に芦屋小学校を新築する際、校庭に植え
継がれた2本の枝垂れ桜で、昭和時代初期まで芦屋の名木として
知られた。昭和33
年(1958)3月に芦屋
史談会有志によって
植樹された4代目か
ら、開森橋の南東の
現在の場所にある。



⑪ ざるまるおうしょうとくひ猿丸翁頌徳碑 (東芦屋町・地図A11)



奥池(奥山溜池)を造ったざるまるまたざえもんやすとき猿丸又左衛門安時(1804－1880)を称えるため、大正5年(1916)に建立された。江戸時代に、芦屋の村々は日照りが続くと田畑の水不足に悩み、水争いが絶えなかった。そこで、当時、芦屋村の年寄としよりであった安時は、天保12年(1841)から元治2年(1865)まで、20年余りの歳月をかけて、広大なため池である奥池を築いた。

平成28年度には、開森橋の架け替えに伴い、少し南東に移動した。

⑫ しょだいさくらばし きょうきゃく初代桜橋の橋脚 (西山町・東芦屋町・地図A12)

桜橋は阪急芦屋川駅のすぐ北側に架かっており、現在のものは3代目。初代の桜橋は、芦屋川東側の住民が大正9年(1920)開設の阪急芦屋川停留場に行く利便性を図るために、大正時代末から昭和時代初め頃に造られた。その名称は、開森橋西詰かいもりにあった名木「潮しほ(汐)見桜みざくら」(24ページ)に由来する。初代の桜橋は、昭和13年(1938)の阪神大水害によって損壊し、現在、橋脚の下部だけが川底に残っている。その後、2代目の桜橋が初代のすぐ北側に架けられ、さらに昭和22年(1947)にも架け替えられて現在に至る。



あしやししていぶんかざい でんさるまるだゆうのはか
13 芦屋市指定文化財 伝猿丸太夫墓 (東芦屋町・地図A13)



歌人として有名な猿丸太夫ゆかりの石造物である。

猿丸太夫は三十六歌仙の一人で8世紀または9世紀の人物ともいわれるが、実在したかどうかさえ不明で、いわば伝説上の歌人といえる。百人一首には、太夫が詠んだとされる「奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の声きくときぞ秋は悲しき」という有名な一首が載せられている(ただし、正確にはこの歌は「よみ人しらず」となっている)。

芦屋神社境内に残る「伝猿丸太夫墓」の名称で芦屋市指定文化財に指定されている石造物は花崗岩製の宝塔で、時代は猿丸太夫の時代の数百年後となる鎌倉時代後期(13世紀)の造立と考えられている。

※現地には解説板があります。

あしやししていしせき あしやしじんじゃけいだいこふん
14 芦屋市指定史跡 芦屋神社境内古墳 (東芦屋町・地図A14)

芦屋神社の境内南西部にある古墳時代後期～飛鳥時代(6世紀末～7世紀初頭)に築造されたと推定される古墳。現在は単独で存在しているが、本来は笠ヶ塚群集墳を構成していた1基である。埋葬施設は横穴式石室で、市内で唯一玄室の天井石が完全に残り、墳丘も良好に残っている。発掘調査は実施されておらず、詳細は不明である。墳丘の形態は円墳で、その規模は径19m、高さ3.5mである。横穴式石室は、現状で全長10.4m、幅1.7m、高さ2.1mである。

なお、この古墳には、芦屋川上流の弁天岩に祀られていた水神が移され、古墳の前には「水神社」の石碑が建てられている。

※現地には解説板があります。



15 業平と公光の石の祠 (月若町・地図B15)

ありわらのなりひら
在原業平(825-880)は平安時代初期の貴族で、へいぜい
平城天皇の孫、
あほしんのう
そして阿保親王の五男である。また、ろっかせん
六歌仙・さんじゅうろっかせん
三十六歌仙の一人であり、歌人としてもよく知られている。

日本文学史上、歌物語の代表作として知られ、全百二十五段からなる『伊勢物語』(平安時代初期に成立)は、古くから主人公が在原業平と考えられている。この『伊勢物語』の第八十七段に業平が芦屋に住んでいた物語があることから、芦屋は業平ゆかりの地として広く知られてきた。

その記述を引くと、「昔、男、津の国菟原の郡、芦屋の里にしるよしして、行ききて住みけり。……」とあり、そのあらすじは、業平は芦屋の里の海辺にあった別荘に住んでいたが、平安京から兄のゆきひら
行平ら貴人が来訪した時、芦屋からちょうど一日の行楽にぬのびき
布引の滝(神戸市中央区)へ案内したところ、日が暮れてしまい、大阪湾の海上に浮かぶ漁火をみながら帰ってきたというものである。

江戸時代の地誌は、業平の別荘跡を「業平朝臣仮居古跡」や「在原業平別荘跡」と記し、現在の業平町にある市民センター付近や月若町付近にその位置を示しているが、いずれも伝承によるものである。

業平と芦屋を結ぶ伝説・物語については、業平が植えたと伝えられる初代のしお
潮(汐)見桜(24ページ)や、業平の魂が芦屋の蛍となって乱れ飛ぶのだという「蛍合戦の怪火」の伝説、『伊勢物語』を愛し業平を尊敬する若者、公光の物語である謡曲「雲林院」(38ページ)等がある。

市内の地名では、在原業平の名にちなんで付けられた「業平橋」と「業平町」、業平の父である阿保親王に由来する「阿保親王塚古墳」(49ページ)と「親王塚町」、謡曲「雲林院」の主人公、公光に由来する「公光橋」「公光町」等がある。

月若町6番には、「業平と公光の石の祠」がある。



芦屋の物語 謡曲「藤栄」

鎌倉時代に芦屋の地にあった北野神社領の芦屋荘あしやのしょうを舞台に、謡曲「藤栄」(成立年・作者ともに未詳)が知られている。そのあらすじは、次のようなものである。

芦屋荘じとうの地頭である芦屋藤左衛門とうざえもんは、幼子の月若つきわかを遺して息を引き取る時、弟の藤栄に後のことを託した。しかし藤栄は助けてやるべき甥の月若を追い出し、芦屋荘を横領してしまった。そこで月若は浜辺で貧しい暮らしをしていた。

ある日、月若の家に旅の僧が訪れた。その夜、貧しい家のこの少年の気品に不審を覚えた僧は、少年の身の上を尋ねようとした。「どうも浜辺の漁師とは思えぬが……」。初めはためらっていた月若も、とうとう不運な身の上を僧に語って聞かせ、僧はいたく同情した。

一方、藤栄は鳴尾の長者とともに芦屋浦で船遊びをし、楽を奏し舞に興じていた。この藤栄の舞をみていた先の旅の僧は、やがて一舞い終わった藤栄に、もう一舞いを望んだ。「無礼な旅の僧め、成敗してくれる」と叫んだ藤栄に、逆に僧が「我は前の執権北条時頼しげけんほうじょうときよりじゃ。最明寺入道さいみょうじにゅうどうと号して世の悪事を正そうと諸国行脚あんぎゃの身である」と名乗りをあげた。

こうして、時頼は藤栄の悪事を追及し、荘園を月若に返してやった。藤栄も心を入れ替え、以後、許されて月若を助け、芦屋荘の経営に励んだので、一族は大いに栄えたという。

「月若橋」や「月若町」等の名は、この物語に由来している。



大正時代の月若橋（「ペコペコ橋」、「どんどん橋」とも呼ばれた）

あしやはいじあと
16 芦屋廃寺跡 (西山町・地図B16)



芦屋廃寺は、飛鳥・白鳳時代(7世紀)に創建された古代寺院である。当時の記録がなく寺院名が不明であるため、「芦屋廃寺」と呼ばれている。

現地は住宅地

となっていて地上にその痕跡はまったく残っていないが、これまでに住宅の建設等に伴い実施した発掘調査によって大量の瓦片が出土し、寺院に関連する遺構等がみついている。昭和11年(1936)には、西山町で礎石が発見され、現在、伝芦屋廃寺心礎(兵庫県指定文化財)として、芦屋市立美術博物館の東庭に移し、展示している(60ページ)。平成11年(1999)に実施した発掘調査では、伽藍の一部と推定される基壇が見つかり、その場所に建っているマンションには解説板が設置されている。

なお、元禄5年(1692)の『寺社御改委細帳』には芦屋村に行基が開いたと伝える塩通山法恩寺(「報恩寺」とも書く)という寺院名が記載されており、在原業平の修復を受けたこと、嘉吉2年(1442)の頃、兵火のため焼失したので、その跡に一字の薬師堂を建てたことを伝えているが、塩通山法恩寺と芦屋廃寺との関係はわかっていない。

※現地には、石碑があります。



17 さんじょうはちまんじんじゃけいだい 三条八幡神社境内の文化財 ぶんかざい (三条町・地図B17)



三条八幡神社の境内にある手水鉢(写真)は徳川大坂城東六甲採石場(44ページ)に連するもので、側面には日向佐土原藩(宮崎県)島津右馬頭忠興が用いたとみられる「⊕」の刻印が彫られている。また、その上

面には盃状穴と呼ばれる民間信仰による人工の窪みが多数みられる。その他、三条町161番にあった北面・東面に「従是東尼崎領」、西面に「従是西尼崎領 他領 入組」、南面に「延享五年(1748)」の文字が彫られた尼崎藩領界石や「皇紀二千六百年」(昭和15年[1940]を指す。「皇紀」は初代天皇である神武天皇が即位したとされる年を紀元とする戦前に用いられた紀年法。史実に基づいていない)、「道路舗装寄附者有志」の文字が彫られた国旗掲揚台の石柱一对、「我等の魂」「皇紀二千六百二年(1942)天長節建之」、「日の丸の旗」「西山手第六町内會」の文字が彫られた国旗掲揚台の石柱一对が移設されている。また、塩通山法恩寺(報恩寺)跡にあった兵庫県指定天然記念物「六甲くろがねもち」(昭和9年[1934]指定、昭和33年[1958]枯死のため指定解除)の石標が移され、その孫木も植樹されている。

18 まえだいせき 前田遺跡 (前田町・地図B18)

縄文時代晩期から弥生時代前期(今から約2500~3000年前)を主体とする遺跡。震災復興調査で発見された。平成15年(2003)に前田公園の建設に伴い発掘調査を行ない、弥生時代前期後半(今から約2500年前)の水田跡や弥生人の足跡が見つかった。

公園内には、発掘調査の解説板と弥生人の足跡の型取り模型を設置している。

※現地には、解説板があります。



ろくじょういせき
19 六条遺跡 (清水町・地図B19)





平成13年(2001)に、清水公園の建設に伴う発掘調査を実施し、平安時代末～鎌倉時代前期(12～13世紀)の井戸や「加」の文字が書かれた墨書土器等が出土した。

周辺で発掘されている同時期の建物跡や園池跡等と合わせて、福原京(神戸市中央区・兵庫区)遷都(治承4年[1180])に伴う平氏の進出と関連する遺跡の可能性が考えられる。

※現地には、解説板があります。

あしやししていぶんかざい ひよしじんじやせきし
20 芦屋市指定文化財 日吉神社石祠 (津知町・地図B20)

日吉神社本殿南東側の浮島内にある石造物。高さ58cm、幅51cmの花崗岩製で、身部と屋根部は別づくりである。屋根の四面には、正面に「永正十七年 大弁才□□(2文字判読できず)」、背面に「」、左面に「村(榎村を示すと推定)、右面に「包嶋」の文字や記号が彫られており、市内に現存する最古の金石文である。すでに16世紀には津知村が成立していたことを示唆する石祠ともいえる。

永正17年(1520)は、戦国の時代、細川高国と細川澄元による内紛が起こっており、摂津豊島の土豪である瓦林政頼が芦屋の鷹尾山に山城を築いた頃である(18・19ページ)。

※現地には、解説板があります。



芦屋の伝説

「芦屋菟原処女」

昔、灘地方の海辺には、湿地に生えるアシを刈って屋根を葺いた家が点在していた。そこで、この辺りを芦屋の里と呼んでいた。この芦屋に菟原処女と呼ばれる美しい娘がいた。多くの男が彼女を恋しく思い、妻にしたいと願っていたが、中でも同じ里の菟原うはら壯士おとこと和泉国いづみ(大阪府南部)からきた茅渟ちぬ壯士おとこ(小竹田壯士)という立派な若者が最後まで競い合って彼女に求婚した。二人は水の中でも火に入っても闘おうと、太刀を握り弓矢を取って激しく争った。

しかし、菟原処女はこのようすをみて心を痛め、「私のような者のために、あんな立派な方たちを争わせた上は、この世で誰と結ばれましょう。黄泉よみの国で待っていきましょう」と、自ら死を選んでしまった。その夜、茅渟壯士の夢に菟原処女が現れた。「ああ、彼女が選んだのは私の方なのだ」と考えて茅渟壯士も後を追って死んでいった。そのことを知った菟原壯士は地団太を踏んで歯ぎしりし、遅れてなるものかと、また、後を追って死んでしまった。

そこで三人の縁者たちが集まって、「若者の一途な心を後世に伝えてやろう」「そうだ、菟原処女の墓を中央に、二人の男の墓をその左右に並べて築いてやろう」と相談したという。こうして築かれたのが、中央おとめづかの処女塚古墳(神戸市灘区所在)と、東側の東求女塚古墳ひがしもとめづか(同市東灘区所在)、西側の西求女塚古墳にしもとめづか(同市灘区所在)であるという伝説である。このため、中央の処女塚は前方を南向きに、東西の両求女塚は前方を処女塚に向けてほぼ等距離に築かれているのだという。

この物語はこのあたりで最も古い伝説の一つで、奈良時代(8世紀)の三人の万葉歌人、高橋虫麻呂、田辺福麻呂、大伴家持がこの伝説を題材にして歌っている。そして後世、この伝説は多くの人の心を打ち、平安時代の『大和物語』、室町時代の謡曲『処女塚』『求女塚もりおとこ』、森嶋外の戯曲『生田川』に素材を与えた。

また、この伝説からは、当時、「芦屋」の地名が現在の市域よりもっと広い範囲を指していたことがわかる。なお、これらの古墳は、発掘調査によって古墳時代前期(3世紀後半～4世紀後半)の前方後円墳もしくは前方後方墳であることが分かっている。

とくがわおおさかしょうひがしろっこうさいせきば せきざい
21 徳川大坂城東六甲採石場の石材 (松ノ内町・地図B21)



芦屋川の東岸、
ちょうど山手幹線
の芦屋川^{すいどう}隧道の真
上にあたる松ノ
内花壇には、徳川
大坂城東六甲採
石場(44ページ)
に伴う石材(割^{わり}
石^{いし})2石を保存・展
示している。これ
らの石材は平成

21年(2009)に西山町で実施した発掘調査で出土し、移設したものである。

※現地には、解説板があります。

かんせつてつどうあしやがわすいどうあと
22 官設鉄道芦屋川隧道跡 (月若町・松ノ内町・地図B22)

現在、JR東海道本線が芦屋川をくぐり抜ける場所には、かつて^{れんが}煉瓦で築かれた芦屋川隧道があった。このトンネルは、明治7年(1874)5月に開業した大阪—神戸間の官設鉄道(現在のJR東海道本線)に伴い、芦屋川の下に建設された天井川^{てんじょうがわ}トンネルであった。その後、大正15年(1926)の神崎—東灘間の複々線化工事に伴って大正9年(1920)頃に解体され、芦屋川^{こせん}跨線水路橋に改築され、現在に至る。

松ノ内緑地の南付近から三条南町の踏切までの線路北側にある斜面には、煉瓦構造物の破片が多数埋め込まれているが、これらは解体された芦屋川隧道の破片であると考えられる。



あしやがわえんてい
23 芦屋川堰堤 (前田町・業平町・地図B23)



昭和13年(1938)の阪神大水害後の芦屋川の大改修に伴い建設された切石による布積みの階段風の堰堤。堰堤右岸の石垣には、「芦屋川堰堤着手 昭和十七年一月 竣工 昭和十七年十月

内務省神戸土木出張所」と刻まれた銘板がある。

くにとうろうくゆうけいぶんかざい あしやぶつきょうかいかん
24 国登録有形文化財 芦屋仏教会館 (前田町・地図B24)

芦屋仏教会館建設の母体であった崇信会は、丸紅商店(現在の丸紅株式会社)の初代社長・伊藤長兵衛(1868-1941)の仏恩報謝の発願に基づき設立されたもので、大正13年(1924)9月11日に芦屋公会堂で仏教講演会を開いたことに始まる。崇信会の発展とともに、昭和2年(1927)6月5日に芦屋仏教会館が開館した。片岡安(1876-1946)が設計し、高橋組が施工。構造は鉄筋コンクリート造4階建て。昭和24年(1949)5月1日には、3階にある書庫を改装して市立図書館が創設され、昭和29年(1954)2月11日に打出小槌町に開設した図書館(54ページ)へ移転するまで使われた。

平成15年(2003)には芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業の道路拡張工事に伴い、解体せずに曳家工法で約2.5m西側に移動した。

平成30年(2018)3月27日に国登録有形文化財に登録された。



25 あしやししていぶんかざい
芦屋市指定文化財

あしやがわ ぶんかてきけいかん
芦屋川の文化的景観 (芦屋川中・下流域・地図B25)



平成24年(2012)4月1日に「芦屋川の文化的景観」という名称で芦屋川の中・下流域を芦屋市指定文化財に指定した。

芦屋川は、源流の六甲山地から河口の大阪湾まで、芦屋市域西部を縦断するように流れている。芦屋の地に暮らす人々は、昔から芦屋川がもたらす水の恩恵を受けてきた。しかし、頻繁に洪水を起こす性格を合わせもち、水害にも悩まされてきた。昭和13年(1938)に起こった阪神大水害の後、昭和14～21年(1939～1946)の河川改修工事を経て、今日の姿となった。

芦屋川の流域には、本書でも取り上げているように、国指定重要文化財ヨドコウ迎賓館(旧山邑家住宅、23ページ)や国登録有形文化財芦屋仏教会館(34ページ)をはじめ、数多くの文化財があり、芦屋川の文化的景観の一部となっている。

芦屋川の文化的景観は、六甲山地を背にする芦屋川がもたらす水の恩恵と水害の脅威が交錯して作られたもので、天井川と扇状地に適応して発展してきた芦屋市の成り立ちを示している。

なお、業平橋より南の川沿いのクロマツは昭和10年(1935)に、業平橋以北の桜は昭和24年(1949)に植えられたものである。

あしやしめん ないぶんかざい
26 芦屋市民センター内の文化財 (業平町・地図B26)



市民センター別館の庭には、昭和52年(1977)に三条岡山遺跡(三条町)で出土した室町時代(14世紀末～15世紀初頭)の五輪塔(写真:左)を保存している。花崗岩製で火輪の屋根には四面に梵字が彫られている。

市民センター本館の入口付近には、西山町にあった徳川大坂城東六甲採石場(44ページ)の刻印石を移設し、保存している。この石材には日向佐土原藩(宮崎県)島津右馬頭忠興が用いたとみられる刻印「⊕」が彫られている。

市民センター本館の南庭には、市民センター本館の場所にあった大正8年(1919)竣工の精道村立芦屋公会堂の棟飾り瓦(写真:下)と西国橋(52ページ)東詰にあった織部灯籠(別名、切支丹灯籠)を保存している。

※現地には、解説板があります。



27 なりひらばし 業平橋 (前田町・業平橋・地図B27)



橋名は、^{ありわらのなり}在原業平^{ひら}に由来している。業平橋が架けられたのは大正6年(1917)3月の芦屋川改修工事の際で、当時は木橋であった。阪神

国道(国道2号)の建設に伴い、大正14年(1925)12月30日に花崗岩^{かこうがん}と鉄筋コンクリートによる橋に改築された。

阪神国道は昭和2年(1927)4月1日に開通した。昭和11年(1936)には、阪神国道をくぐる歩道が橋の下に設けられている。

28 しせいしこうきねんこっきけいようだい 市制施行記念国旗掲揚台 (公光町・地図B28)

国旗掲揚台の一部。東面には、「紀元二千六百年 市制施行 記念」の文字が、南面には「昭和十五年十一月十日 中芦屋衛生組合」の文字が彫られている。これら刻まれた文字から、この国旗掲揚台が、皇紀^{こうき}2600年(昭和15年[1940])を指す。「皇紀」は初代天皇である神武天皇^{じんむ}が即位したとされる年を紀元とする戦前に用いられた紀年法。史実に基づいていない)と芦屋市制施行とを記念して、昭和15年(1940)11月10日に中芦屋衛生組合によって建てられたものであることがわかる。

なお、芦屋市制は、^{きゅうじょうまえ}宮城前広場(現在の皇居前広場)で第2次^{このえふみまろ}近衛文麿内閣が紀元二千六百年記念式典を挙行した昭和15年11月10日に合わせて施行している。





現在の芦屋警察署は、平成13年(2001)竣工のものであるが、旧庁舎の南東隅にあった正面玄関が部分的に保存されている。旧庁舎は、昭和2年(1927)竣工。兵庫県営繕課の設計で、鉄筋コンクリート造3階建てであった。

保存されている旧正面玄関は花崗岩かこうがんで造られており、アーチの要石には夜間警備の象徴としてミミズクが彫刻されている。

コラム

芦屋の物語 謡曲「雲林院」

室町時代の謡曲「雲林院」(成立年・作者ともに未詳)には芦屋にまつわる物語が謡われており、そのあらすじは次のようなものである。

芦屋に住んでいた公光きんみつは、若い頃から『伊勢物語』(27ページ)を読み、在原業平ありわらのなりひらをととても尊敬していた。ある夜、夢の中で美しい花園の中に業平が現れた。その夢の舞台は、京の北山ひらさきの紫野にある雲林院であることがわかった。そこで、芦屋からはるばる京に上り雲林院を訪ねてみた。ちょうどそれは夢のとおり花の頃であった。花の一枝を折った公光の前に翁おきなが現れた。公光が夢に誘われ業平を慕ってここまでやってきたことを話すと、翁は夜にその花のかげで待っていれば、『伊勢物語』の秘伝を授けられよう、と語って姿を消した。やがて夜半になると、翁の言葉通り、業平の霊が現れて、『伊勢物語』を語った。

「公光橋」「公光町」等の名は、この物語に由来している。

はんしんでんてつあしやがわきょうりょう
30 阪神電鉄芦屋川橋梁 (川西町・公光町・地図B30)



明治38年(1905)4月12日、阪神電気鉄道の大阪(出入橋)一神戸(三宮)間が開業した。

現在、阪神電鉄芦屋駅のホームになっている芦屋川橋梁の橋脚は、中央の部分が花崗岩の切石による石積みで、その両

端をコンクリートで南北方向に拡張している。この石積みの部分は、大正時代以前のものである。

さるまるくんしょうこうひ
31 猿丸君彰功碑 (浜芦屋町・地図B31)

昭和5年(1930)建立。精道村時代に活躍した猿丸又左衛門安明(1872-1920)の生い立ちや精道村長を2回、芦屋郵便局長、県会議員等を務めた経歴、国鉄(鉄道院)芦屋駅(現在のJR芦屋駅)の創設や芦屋川の改修及び耕地整理等の公共事業を企画し、精道村の発展の礎を築いた功績が刻まれている。

題額は、当時立憲政友会総裁であった犬養毅(昭和6年〔1931〕に第29代内閣総理大臣に就任)の揮毫による。



32 ^{づか}ぬえ塚 (浜芦屋町・地図B32)



江戸時代の地誌である『^{せつようぐんだん} 撮陽群談』(元禄14年[1701])、『^{せつづめいしよずえ} 撮津名所図会』(寛政8年[1796])等に記されている怪物の^{ぬえ}鶴退治の伝説に基づいて昭和10年代に建てられた石碑。伝説のあらすじは、次のとおり。

およそ800年もの昔、^{みなもとのよりまさ}源頼政が京都の御所を騒がす^{ぬえ}鶴(トラツグミの別称)という鳥に似た鳴き声の怪物を弓矢で射殺すと、頭がサル、体はタヌキ、手足はトラ、尾はヘビという妖怪であった。その遺骸を丸木舟にのせて川に流したところ、淀川を流れ、大阪湾を漂い、芦屋の浜に漂着した。村人たちは崇りを恐れて、丁寧に塚を作^{とむら}って弔い、この塚のことを「ぬえ(鶴)塚」と呼ぶようになった。

※現地には、解説板があります。

33 ^{あしやゆうえんち} 芦屋遊園地 (^{あしやこうえん} 芦屋公園) (浜芦屋町・松浜町・地図B33)

現在の芦屋公園は、戦前には芦屋遊園地と呼ばれていた。これは明治40年(1907)に^{せいどう}精道村が開設したもので、美しい松林の散策や^{しょうろう}松露採りを楽しめました。芦屋公園内には「芦屋遊園」の石碑があり、その他にも戦前の^{さるまるくんししょうこうひ}猿丸君彰功碑(39ページ)、「ぬえ塚」の石碑(40ページ)、「旧芦屋遊園乗合バス待合所」(41ページ)等が現存している。

なお、芦屋公園テニスコートは昭和31年(1956)に開設したもので、同年には第11回国民体育大会のテニス競技が開催された。



34 きゅうあしやゆうえんのりあい まちあいしよ 旧芦屋遊園乗合バス待合所 (松浜町・地図B34)



昭和初期に造られたと推定される鉄筋コンクリート造のバス待合所。現在は、芦屋公園の休憩所として利用されている。

芦屋市域では、昭和3年(1928)4月1日から阪神芦屋バスが、次いで7月28日から阪急バス(後の阪神合同バス)が運行された。これらの路線は山麓から海岸を結ぶもので、芦屋川の東堤防上を南北に走っていた。このバス待合所は、これらの路線に伴うものであると考えられる。

35 きげんにせんろっぴやくねんきねんこっけいようだい 紀元二千六百年記念国旗掲揚台 (茶屋之町・地図B35)

昭和15年(1940)の皇紀2600年(「皇紀」は初代天皇である神武天皇じんむが即位したとされる年を紀元とする戦前に用いられた紀年法。史実に基づいていない)を記念して作られた国旗掲揚台の一部である。北面には「芦屋市茶屋之町」、東面には「紀元二千六百年記念」、南面には「昭和十五年二月十一日 親和會建之」の文字が彫られている。しかし、昭和15年2月11日には「芦屋市」はまだ誕生しておらず(芦屋市制施行日は昭和15年11月10日)、さらに「茶屋之町」が誕生したのは町名改正が実施された昭和19年(1944)1月10日であることから、史実と合っていない点が興味深い。



36 国登録有形文化財

旧芦屋郵便局電話事務室（芦屋モノリス）

（大槻町・地図B36）



旧芦屋郵便局電話事務室は、昭和4年(1929)に建設された電話交換局である。設計は、通信省技師であった上浪朗^{うえなみあきら}。鉄筋コンクリート造2階建てで、新築当時の外観を留めている。外壁は1階が濃茶色、2階が薄茶色と2色のスクラッチタイルが貼り分けられている。所々に獅子頭^{ししがしら}とレリーフによる装飾が施され、建物の北面には連続して半円アーチを設けている。

平成16年(2004)にNTT西日本のお客様窓口が廃止された後、翌年からは結婚式場・レストランの「芦屋モノリス」となっている。

平成29年(2017)6月28日に国登録有形文化財に登録された。

※現地には、解説板
があります。



とくがわおおさかじょうひがしろっこうさいせきばいわがひらくいんぐん
37 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群
 せきざいなど ろくろくそうじょうすいじょう
石材等 (六麓荘浄水場) (六麓荘町・地図C37)



芦屋市六麓荘浄水場内では、平成14年(2002)に発掘調査を実施し、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群(44ページ)の肥前唐津藩(佐賀県)寺澤志摩守廣高の石切場跡

がみつかった。

浄水場前には発掘調査で出土した石材(割石)4石や、六麓荘住宅地(45ページ)開発時の街路灯、量水器蓋、消火栓蓋を移設し、保存している。

※現地には、解説板があります。

とくがわおおさかじょうひがしろっこうさいせきばいわがひらくいんぐん
38 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群
 こくいんせき あしやだいがく
刻印石 (芦屋大学) (六麓荘町・地図C38)

六麓荘町・岩園町には、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群(44ページ)が分布している。現在も六麓荘町の住宅の石垣には、当時の採石に伴う刻印石・矢穴石等の石材がしばしばみられる。

この場所の石垣には、近くの発掘調査地で出土した若狭小浜藩(福井県)京極若狭守忠高が用いた「㊦」の刻印石が移設保存されている。

※現地には、解説板があります。



徳川大坂城東六甲採石場

大坂城は天正11年(1583)に豊臣秀吉が築いた城としてよく知られているが、現在の大阪城は秀吉が築いた大坂城を江戸幕府が元和6年～寛永6年(1620～1629)に完全に埋めて、改めて築いたものである。したがって、地中に埋まっているものを「豊臣(期)大坂城」、現存のものを「徳川(期)大坂城」と呼び分けている。

元和6年から建設工事の始まった徳川大坂城は、幕藩体制の下、西国35カ国64家もの大名たちが動員され、共同事業として行なった「天下普請」であった。石垣は加工された切石造りの高石垣で、約100万石が使用されたと推定されているが、その約半数の石材が採石されたのが東六甲の石切場であった。西宮市から芦屋市、神戸市東灘区に残る石切場跡は、現在、「徳川大坂城東六甲採石場」と呼ばれている。この採石場は後述する刻印石の分布状況から、東より甲山刻印群、北山刻印群、越木岩刻印群、岩ヶ平刻印群、奥山刻印群、城山刻印群の6群に分けられている。この内、芦屋市域には岩ヶ平刻印群、奥山刻印群、城山刻印群の3群が分布している。

この採石場跡では、石材に藩や家臣、人物、地名、手順、寸法等を示す符号や略号が彫られた「刻印石」や、石材を割る矢(クサビ形の道具)を打ち込むための矢穴が割られずに残る「矢穴石」、真っ二つに割られた矢穴痕が残る「割石」をはじめ、採石の痕跡が数多くみつかっている。

六甲山中で採石された石材は、浜辺まで運搬され、そこから船で大阪湾を通して大坂城に運ばれた。呉川遺跡等(58・59ページ)では、当時、浜辺に集積されたものと推定される刻印石等が出土している。なお、西宮市域の甲山刻印群の採石場が「大坂城石垣石丁場跡」東六甲石丁場跡の名称で平成30年(2018)2月13日に国指定史跡に指定されている。



とくがわおおさかじょうひがしろっこうさいせきばいわがひらくくいんぐん
③9 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群
こくいんせき ろくろくそうりよくち
刻印石（六麓荘緑地）（六麓荘町・地図C39）



六麓荘緑地内には、平成16年（2004）に実施したこの場所を含む大規模な発掘調査で出土した刻印石4石、割石1石を集めて保存している。

これらは徳川

大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群（44ページ）に伴う石材で、防長萩藩（長州藩、山口県）毛利長門守秀就が用いた刻印である「〇」「大」「二」が彫られた石材がみつまっている。

※現地には、解説板があります。

ろくろくそうせきひ ろくろくそうじゅうたくち
④0 六麓荘石碑（六麓荘住宅地）（六麓荘町・地図C40）

六麓荘住宅地は、株式会社六麓荘が昭和4年（1929）から昭和6年（1931）にかけて造成した住宅地である。「六麓荘」の名称は、「風光明媚な六甲山の麓にある別荘地」にちなんだものである。

当時としては珍しく、道路は全面的に舗装され、上水道、下水道、都市ガスが整備されていた。さらに、電柱や電線によって景観が損なわれないように、電力線と電話線を地下に埋設する画期的な試みもなされた。

六麓荘緑地の一角には、「六麓荘」の文字が力強く彫られた石碑が残っている。



41 や そづかこふんぐんいわがひらしぐんだい ごうふん
八十塚古墳群岩ヶ平支群第13号墳 (岩園町・地図C41)



八十塚古墳群は、芦屋市東部～西宮市西部の六甲山地南東麓の丘陵及び台地上に分布する古墳時代後期～飛鳥時代(6世紀後半～7世紀半ば)の群集墳である。

その分布範囲は、東西約900m、南北約1100mで、群集墳としては阪神間で最大規模である。古墳群内は朝日ヶ丘支群、岩ヶ平支群、いながひら 剣谷支群、けんたに 老松支群、おいまつ 苦楽園支群の5支群に分けられている。

八十塚古墳群岩ヶ平支群第13号墳は、いわそのてんじんじや 岩園天神社本殿北側の森林に残る古墳で、長い年月の間に崩れた横穴式石室が露出している。石室の現存長は約8m。発掘調査は行なわれておらず古墳の詳細は不明であるが、6世紀後半頃に築造されたものと考えられる。

42 や そづかこふんぐんいわがひらしぐんだい ごうふん
八十塚古墳群岩ヶ平支群第14号墳 (岩園町・地図C42)

岩園天神社の境内南部にある古墳。古墳の上にはあんせい 安政5年(1858)に建てられたえんのおづぬ 役小角像がある。役小角(伝634-701)はあすか 飛鳥時代から奈良時代の呪術者で、しゅげんどう 修験道の開祖とされる人物である。

この像の南西の斜面には、横穴式石室の一部が露出している。発掘調査は行なわれておらず古墳の詳細は不明であるが、6世紀後半頃に築造されたものと考えられる。



とくがわおおさかじょうひがしろっこうさいせき ばい わ が ひらこくいんぐん
43 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群

こくいんせき いわぞのだいにじどうゆうえん (岩園町・地図C43)
刻印石 (岩園第二児童遊園)



この公園を含む周
辺一帯の住宅地造成
に伴い、平成16年
(2004)に実施した
発掘調査で出土した
刻印石2石と矢穴石2
石、割石6石を集めて
保存している。刻印
「𠄎」は「鴈(がん)」

と呼ばれるものである。

※現地には、解説板があります。

あしやししていぶんかざい
44 芦屋市指定文化財

とくがわおおさかじょうひがしろっこうさいせき ばく やまこくいんぐんこくいんせき
徳川大坂城東六甲採石場奥山刻印群刻印石
あしやしれいえん (大字劔谷・地図C44)
芦屋市霊園

平成5年(1993)に芦屋市霊園の拡張工事に伴い実施した徳川
大坂城東六甲採石場奥山刻印群(44ページ)の発掘調査で出土
した刻印石1石と割石12石を霊園北東部の一角に集め、保存し
ている。刻印石には防長萩藩(長州藩、山口県)毛利長門守秀
就が用いた「〇」と「∪」の刻印が彫られている。この刻印石を

「徳川大坂城東
六甲採石場出土
刻印石」という
名称で、平成16
年(2004)3月26
日に芦屋市指定
文化財に指定し
ている。

※現地には、解説
板があります。



とくがわおおさかじょうひがしろつこうさいせきばおくやまこくいんぐんこくいんせき
45 徳川大坂城東六甲採石場奥山刻印群刻印石
しりつあしやびょういん
(市立芦屋病院) (朝日ヶ丘町・地図C45)



市立芦屋病院の敷地南西部にある巨大な刻印石で、江戸時代初期(1620～1629)の徳川大坂城東六甲採石場奥山刻印群(44ページ)に伴うものである。長さ約6.5m、幅約3.1m、高さ2.6m

以上の巨石で、石材の東面に「〇」の刻印をみることができる。これは防長萩藩(長州藩、山口県)毛利長門守秀就が用いた刻印である。西面には石材を割りとるために彫られた矢穴痕がある。

あさひがおいせき
46 朝日ヶ丘遺跡
あしやしせいせきしょつかくもけい
(芦屋市遺跡触覚模型) (朝日ヶ丘町・地図C46)

昭和39年(1964)、道路工事によって発見された縄文時代前期(今から約6000年前)の遺跡。遺跡の範囲内にある朝日ヶ丘集会所内には、出土した縄文土器と石器の一部を展示している。集会所の南側には、芦屋市域の地形を縮尺1/300で表し、主な遺跡の位置を示した芦屋市遺跡触覚模型を設置している。また、城山南麓遺跡の中世墳墓(49ページ)や平成5年(1993)に呉川町で出土した徳川大坂城東六甲採石場から採石され、浜辺まで運びおろされた割石4石を移し、保存・展示している。

※現地には、解説板があります。



47 城山南麓遺跡の中世墳墓 (朝日ヶ丘町・地図C47)



昭和57～58年(1982～1983)に実施した城山南麓遺跡(山芦屋町)の発掘調査でみつかった戦国時代(16世紀)の中世墳墓である。発掘調査後、朝日ヶ丘集会所に移設し、保存している。この墓は、簡素な墓標として

石材を立て、石を四角く並べて取り囲んだものである。

城山南麓遺跡では、これまでに16世紀の建物跡や墓跡、火葬場跡などがみつかり、これらは城山山頂の鷹尾城(18ページ)と関連するものと考えられている。

※現地には、解説板があります。

48 阿保親王塚古墳 (翠ヶ丘町・地図C48)

古墳時代前期(4世紀)に築造された古墳。現状では直径約36m、高さ約3mの円墳を方形の周濠が囲むが、これは江戸時代に阿保親王の子孫と称する長州藩(山口県)毛利氏が大改修を行なった後の姿である。宝永年間(1704～1710)には副葬品の銅鏡が少なくとも8面出土し、その内の4面が阿保山親王寺(打出町)の寺宝となっており、芦屋市指定文化財に指定されている。平成30年(2018)に宮内庁が測量調査をした際には、墳丘の南西部で円筒埴輪列の一部が確認されている。

この古墳の被葬者について、江戸時代の地誌『摂津志』(享保20年[1735])等には「阿保親王墓」の名がみえ、平安時代の皇族で、在原業平の父である阿保親王(792-842)の墓と認識されていたことがわかるが、4世紀の築造年代とはまったく合わないことで、阿保親王とは関係がないことになる。

実際の被葬者は不明であるが、4世紀に阪神地域を治めていた豪族であろう。



49 だいにんこうせんせきひ 大楠公戦跡碑 (楠町・地図D49)



けんむ
建武3年(1336)2月10
日に起こった楠木正成と
あしかがたかうじ
足利尊氏が戦った打出
がっせん
合戦(51ページ)では、正
ただよし
成が足利直義を撃破し、尊
氏らを兵庫に敗走させた。
この碑は、精道村教化団体
れんごう
聯合会が楠公六百年祭記

念事業の一つとして、昭和10年(1935)2月11日に建立した。題字「大楠公戦跡」の文字は、ほんじょうしげら
本庄繁陸軍大将の筆による。なお、楠町の
名は、この碑に由来する。

平成27年度に実施した楠児童遊園の改修工事に伴い、現在の場所に移設した。

※現地には、解説板があります。

50 うちでばし 打出橋 (上宮川町・楠町・地図D50)

阪神国道(現在の国道2号)に伴う橋で、宮川に架かっている。大正15年(1926)3月に竣工した。橋の長さは約7.3m、構造は鉄筋コンクリート造。橋の四隅には珍しい照明が付けられ、らんかん
欄干は
いもの
鋳物で「S」の字を横にしたような装飾が付けられている。

同じく阪神国道に伴う市内のなりひら
業平橋(37ページ)
や武庫大橋(尼崎市・西宮市)をはじめとする市外の橋をみると、それぞれに欄干の装飾や橋のデザインが異なり、当時の技術者の技とこだわりを感じることが出来る。



打出合戦

後醍醐天皇ごだいごによる建武けんむの新政しんせい(元弘3年～建武3年〔1333～1336〕)は、天皇親政の公家政治の復興を目指して始められたが、期待を裏切られた武士たちは武家政治の復活を望み、武士の名門である足利尊氏あしかがたかうじの下に次第に集まっていった。建武2年(1335)11月、ついに尊氏は鎌倉で反旗ひるがえを翻し、翌年1月11日に京都へ入った。これに対して新田義貞にいだしんぎせい・楠木正成くすのきまさしげ・北畠顕家きたばたけあきいえらは力を合わせて1月27日には尊氏を京都付近で破り、逃れた尊氏は2月3日に兵庫に着いた。そして、尊氏は兵庫で再び京都へ進撃する態勢を整えた。

こうして、新田・楠木・北畠らの軍勢は尊氏追討に向かい、尊氏勢も出陣して、建武3年(1336)2月10日に楠木勢と尊氏勢との間に打出合戦が起こった。この合戦では、正成が尊氏の弟、足利直義ただよしに打撃を与え、直義は兵庫へ逃げ延びた。2月11日の豊島河原てしまがわらの合戦で尊氏は新田義貞に敗れ、九州へ逃げた。しかし、5月には勢力を盛り返して兵庫へ迫り、迎え撃つ新田・楠木軍と戦って正成を敗死せしめ、敗走する義貞を追って京都へ入った。やがて尊氏は光明天皇こうみょうを立て、後醍醐天皇は12月に吉野に逃れ、ここに南北朝時代が始まった。

打出浜合戦

足利尊氏あしかがたかうじは、暦応元年(1338)8月に北朝から征夷大將軍せいゐたいしやうぐんに任ぜられ、室町幕府を開いた。しかし、その後、足利氏の内紛ちゆうのもろなおや諸大名の抗争が顕著になってきた。尊氏は側近の高師直たかしのり・師泰兄弟しゆたいを重用したので、弟直義との間には次第に不和となり、諸大名も両派に分かれて争うようになった。直義は一時南朝に降り、正平6年(観応2年〔1351〕)1月に京都に攻め入った。尊氏は丹波・播磨に敗走し、再び京都を目指して兵庫に至った。こうして、2月17日、尊氏・師直・師泰軍と、これを迎える直義軍との間に打出浜合戦が起こった。結局は尊氏側の惨敗に終わった。2月20日、尊氏と直義の間に和議が成立し、2月26日に尊氏は兵庫を發って上洛した。

51 西国街道

(茶屋之町・宮塚町・打出小槌町・春日町・打出町など・地図D51)



古代には、都と大宰府を結ぶ山陽道が芦屋市域を通っていた。都から南西へ西摂平野を横切ってきた道が初めて大阪湾岸に出たところに「打出」の地名がつけられたとされる。やがて

江戸時代には、山陽道は西国街道の名で呼ばれるようになり、西宮から打出に入って2本に分岐していた。打出から北西にのび、茶屋之町付近で現在の国道2号にほぼ重なるルートの本街道と、打出からほぼ国道43号と重なるルートで西進する浜街道がそれである。打出で2本に分岐した街道は、西方、生田神社(神戸市中央区)の南手で合流して中国地方へと続いていた。当時、大名行列等は本街道を通り、民衆は浜街道を通ったという。鳴尾(西宮市)と御影(神戸市東灘区)の間、津知には一里塚が築かれていた。

江戸時代に刊行された『福原餐鏡』(延宝8年[1680])、『陽群談』(元禄14年[1701])、『撰津志』(享保20年[1735])、『撰津名所図会』(寛政8年[1796])等の多くの地誌には、西国街道沿いの芦屋の風景が描かれている(12ページ)。

現在も打出小槌町付近に本街道の面影が部分的に残っている。宮川に架かる西国橋(写真:上)の橋名や阪神打出駅北方の鳴尾御影線沿いに建てられた阿保親王廟石碑(写真:右)等の石造物からも、西国街道が通っていたことを知ることができる。



とくほんしょうにんみょうごうとう
52 徳本上人名号塔 (打出小槌町・地図D52)



徳本上人(1758-1818)は、江戸時代中期の浄土宗の僧で、紀伊国(和歌山県)日高郡志賀村に生まれ、俗姓は田伏氏である。幼少の頃から深く仏道に入り、仏教を深く信奉して、常に念仏行に励み難行苦行した。教化のため、紀伊(和歌山県)・河内(大阪府)・摂津(兵庫県)・山城(京都府)・大和(奈良県)・近江(滋賀県)・江戸(東京都)・相模(神奈川県)・下総(千葉県)・茨城県・埼玉県・東京都)・信濃(長野県)・飛騨(岐阜県)・越後(新潟県)・越中(富山県)・加賀(石川県)等、広く各地を巡っている。

また、上人はたびたび打出を通り布教したので、帰依する村人が多かった。徳本上人名号塔は、そのような打出の西国街道沿いに建てられたもので、「南無阿弥陀仏(名号) 徳本」の文字が刻まれている。

コラム

芦屋の伝説「打出の小槌」

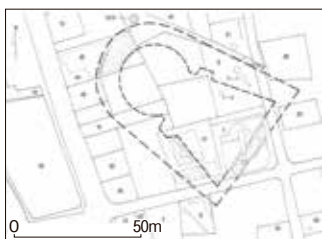
「打出」の地名は、その地が西国街道が京の都から南西に下って初めて海岸に打ち出る場所であることから名付けられたといわれている。その打出村にまつわる次のような伝説がある。

昔、打出村にお金持ちの長者が住んでいた。長者は小さな小槌を持っていた。その小槌を打ち振ると何でも願い事がかなえられるという宝物であった。

この小槌は、もとは打出の沖にすんでいた竜の神様が持っていたのだと伝えられ、竜の神様が人間の姿になって、朝廷に差し上げたものだといわれている。どのようにして長者の手に入ったのかはわからないが、昔、都で仕えていた時に手柄を立てたので、褒美にもらったのだろうといわれている。

この小槌はこの上ない宝物であったが、ただ一つ困ったことに、鐘の音が聞こえてくると、それまで打ち出した宝物のすべてを失ってしまうそうである。

53 打出小槌古墳 (打出小槌町・地図D53)



古墳時代中期末(5世紀末)に築造された墳丘長約60mと推定される市内最大の前方後円墳であるが、室町時代(15世紀後半～16世紀初頭)の耕作地開発によって、墳丘は完全に消滅している。発掘調査によって周濠跡がみつかり、埴輪(8ページ)や葺石等が出土している。前方部の発掘調査後に建設されたマンションの入り口部分には、解説板が設置されている。

なお、この付近には打出小槌遺跡も分布しており、市内最古の遺物である旧石器時代後期(今から約2万年前)の国府型ナイフ形石器(7ページ)が出土している。

54 国登録有形文化財 旧松山家住宅松濤館 (芦屋市立図書館打出分室) (打出小槌町・地図D54)

現在の芦屋市立図書館打出分室。この建物は明治時代に大阪に建設された銀行の建物(「逸身銀行」説、「東京貯蔵銀行大阪支店」説等がある)を松山與兵衛が美術品を収蔵するために購入し、昭和5年(1930)に現在の場所に移築したものである。その後、昭和29～62年(1954～1987)までは芦屋市立図書館本館として、平成2年(1990)からは図書館打出分室として利用され、現在に至っている。平成21年(2009)1月8日に「旧松山家住宅松濤館」及び「旧松山家住宅塀」という名称で国登録有形文化財に登録された。

ルスティカ仕上げの花崗岩を積む重厚な外観や縦長のアーチ窓、内側のロマネスク調の木製飾り柱等が特徴である。





古墳時代中期後半(5世紀後半)に築造された墳丘長約55mの前方後円墳(帆立貝形前方後円墳)。前方部は鎌倉時代～室町時代の耕作地開発によって削られてしまい、後円部のみが円墳

状に残っている。後円部の墳頂には、埋葬施設の粘土槨を確認している。発掘調査では埴輪(55ページ)等が多数出土しており、全国的に珍しい二重の周濠もみつまっている。

※現地には、解説板があります。

コラム

かなつやま
金津山古墳にまつわる伝承

金津山古墳には、「黄金塚」「金塚」といった別称があり、その昔、阿保親王が打出の村人たちの困窮に備えて黄金一千枚、金瓦一万枚を埋めさせたという伝承がある。この伝承は、元禄14年(1701)に刊行された地誌『摂陽群談』にすでに記されており、村人たちが「朝日さす 入り日輝くこの下に 黄金千枚 瓦万枚」と謡い伝えたといわれている。宝永7年(1710)刊行の『兵庫名所記』にも同様な記述があり、以後、数多くの地誌類にもたびたび登場している。

この黄金埋蔵の伝承は、古墳から出土する円筒埴輪が割れて破片になると黄金色の瓦のようにみえることから、それに由来するという説がある。



金津山古墳出土の円筒埴輪
 (高さ43.5cm)

打出の地は古くから壁土の産地として知られ、明治時代の中頃には打出の先覚者である齊藤幾多さいとういくたが、その特有の粘りや土質の良さに着目して陶工を招いてお庭焼にわやきの窯を築いた。明治42年(1909)には、春日町21番に登り窯を築いて、京焼の祖といわれる野々村仁清ののむらにんせいの流れを汲む阪口庄蔵さかぐちしょうぞう(初代砂山さざん)に継承され、「打出焼」と称した。茶器や花器等の渋い作風は、広く京阪神の人々に愛用されるようになった。原料の粘土の不足は、信楽・京都方面の土を混入して補った。

昭和12年(1937)に初代砂山が没し、2代目として阪口淳さかぐちじゅんが窯元を継ぎ、「打出焼」の普及に努力を続けられたが、昭和40年頃に製作は中止された。



打出焼の刻印「うちで」
(長さ11mm、幅6mm)

56 若宮まちかどひろばの石造物わかみやまじかどひろばのせきぞうぶつ (若宮町・地図D56)

この広場は、市内にあった古い石造物を集め、再利用してつくられている。石造物には、六麓荘町で発掘された徳川大坂城東とくがわおおさかじょうひがし六甲採石場岩ヶ平刻印群ろっこうさいせきばいわがひらくいんぐん(44ページ)に伴う若狭小浜藩わかさおばま(福井県)京極若狭守忠高きょうごくわかさのかみただたかの用いた「㊦」刻印、因幡鳥取藩いんぱんとっとり(鳥取県)池田いけだ新太郎光政しんたろうみつまさの用いた「㊧」刻印、「㊨」刻印が彫られた刻印石や、山芦屋町にあった水車場すいしゃばで使われていた石臼いしうす、阪神国道の路面電車の敷石等がある。

※現地には、解説板があります。



57 とみたさい かきゅうきょ 富田碎花旧居 (宮川町・地図D57)



「兵庫県文化の父」と呼ばれる詩人、富田碎花の旧居。昭和9年(1934)3月から昭和11年(1936)11月までは、谷崎潤一郎^{たにざきじゅんいちろう}が居住しており、谷崎潤一郎^{うちで}の「打出の家」とも呼ばれている。谷崎が引っ越した後、昭和14年(1939)5月に富田碎花が入居した。母屋^{おもや}は昭和20年(1945)8月の阪神大空襲によって焼失し、昭和29年(1954)に再建されたものである。碎花が昭和59年(1984)10月17日に93歳で逝去した後、市が譲り受けて整備し、昭和62年(1987)5月より富田碎花旧居として公開している(開館は日曜日と水曜日の10～16時[入館は15時まで]。12月29日～1月3日、8月13日～19日は休館。入館は無料。問い合わせ: 芦屋市教育委員会生涯学習課 0797-38-2091)。

コラム

たにざきじゅんいちろう 谷崎潤一郎と芦屋

谷崎潤一郎(1886-1965)が関西へ移ってきたのは、大正12年(1923)の関東大震災がきっかけで、その後、昭和19年(1944)までに阪神間で13回も引っ越している。その内、昭和9年(1934)3月から昭和11年(1936)11月まで暮らしたのが現在の富田碎花旧居で、谷崎潤一郎の「打出の家」と呼ばれている(57ページ)。この家で、谷崎は3番目の妻となる松子^{まつこ}と結婚式を挙げ、松子の娘と姉妹たちと暮らした。

富田碎花旧居で、谷崎が暮らした頃から残る建物は、現在の展示棟である門屋^{かどや}のみで、谷崎はこの2階を書斎とし、『源氏物語』の現代語訳や『猫と庄造と二人のをんな』を執筆した。このほか、庭の擬春日燈籠^{ぎかすがどうろう}や松の木も、谷崎が住んでいたところからのものである。



58 みやがわかしょういせき とくがわおおさかじょうせきざい 宮川河床遺跡の徳川大坂城石材

(呉川町・地図D58)



宮川河床遺跡では、浜打出橋から南約60mの西側護岸寄りの川底に、やあな矢穴痕をもつ5石のわりいし割石をみることができる。

これらは、1620年代の徳川大坂城再築のために、徳川

おおさかじょうひがしろつこうさいせきばおくやまこくいんぐん

大坂城東六甲採石場奥山刻印群(44ページ)で採石され、浜辺まで運びおろされた石材で、このあたりは大坂城に向けて船積みするための集石場であった。

近くでは、くれかわ呉川遺跡(58・59ページ)やにしくら西藏遺跡(西藏町)でもこくいんせき刻印石や割石がみついている。

59 くれかわ いせきしゆつど とくがわおおさかじょうこくいんせき 呉川遺跡出土徳川大坂城刻印石

(りんこうせん臨港線) (呉川町・地図D59)

呉川遺跡は、1620年代の徳川大坂城再築のためにとくがわおおさか徳川大坂

じょうひがしろつこうさいせきばおくやまこくいんぐん

城東六甲採石場奥山刻印群(44ページ)から採石された石材を大坂城に向けて船積みするための集石場であった。この場所には、平成5年(1993)に芦屋中央線の整備工事によって出土した刻印

石3石、割石2石

を移し、保存して

いる。刻印石には、

いずもまつえ出雲松江藩(島根

県)堀尾山城守忠

晴が用いた「わりいし」刻

印が彫られている。

※現地には、解説

板があります。



60 呉川遺跡出土徳川大坂城刻印石

あしやしりつびじゆつはくぶつかん (伊勢町・地図D60)



芦屋市立美術博物館の前庭には、昭和62年(1987)に芦屋中央線の改修工事で出土した呉川遺跡の刻印石7石と割石2石が、山根耕の「時を結ぶ」という美術作品の一

部として利用され、野外展示されている。これらの刻印石には、防長萩藩(長州藩、山口県)毛利長門守秀就所用の「〇」「二」刻印、出雲松江藩(島根県)堀尾山城守忠晴所用の「㊦」刻印、若狭小浜藩(福井県)京極若狭守忠高所用の「㊧」「㊨」刻印、播磨赤穂藩(兵庫県)池田右京太夫政綱所用の「㊩」刻印、藩不明の「㊪」刻印が彫られている(問い合わせ:芦屋市立美術博物館0797-38-5432)。

コラム

伊勢町と伊勢講田

伊勢町の町名は、江戸時代に伊勢神宮参詣のための伊勢講田があったことに由来している。伊勢町は、昭和19年(1944)の町名改正によって、小学の「伊勢講田」の全域と「西新田」の東部にあたる範囲に誕生した。この「伊勢講田」とは、伊勢講と呼ばれるグループが共同管理していた田である。伊勢講は伊勢神宮の参詣を目的として結成されたグループで、講に参加する講員の定期的な積立金と講田からの収入をもとに、くじなどで選ばれた講の代表者が伊勢神宮へ参詣できるという仕組みであった。

芦屋を出発した伊勢講の代表者たちは、大津へ出て琵琶湖の東から鈴鹿峠を越えて松阪を経て伊勢に参詣した。

したがって、伊勢町の町名は、在原業平が主人公とされる『伊勢物語』(27ページ)とはまったく関係がない。

61 ひょうごけんしやうぶんかざい
兵庫県指定文化財
でんあしやはいじしんそ
伝芦屋廃寺心礎 (伊勢町・地図D61)



あすか はくほう
飛鳥・白鳳時代(7世紀)創建の芦屋廃寺(29ページ)の塔の中心
そせき
礎石と考えられており、昭和11年(1936)に現在の西山町付近で
発見され、その後、西山町、月若町の個人住宅内に移設された。平
成5年(1993)に所有者から芦屋市に寄贈されたのを機に、芦屋市
立美術博物館の東庭に移設し、展示している。大きさは最大長130
cm、高さ58cmである。上面のほぼ中央に直径31cm、深さ16cmの柄
ほぞ
穴あながあり、この穴にたまった水を「イボ落とし」に使ったという興
味深い伝承がある。

なお、この礎石には1620年代の徳川大坂城築城時の石垣用石材
の採石に伴い日向佐土原
ひゅうがさどわら
藩(宮崎県)
しまづうまのかみ
島津右馬頭
ただおき
忠興が用いたと考えられ
ている「⊕」刻印が彫ら
れている(問い合わせ:芦
屋市立美術博物館0797-
38-5432)。

※現地には、解説板があ
ります。

